

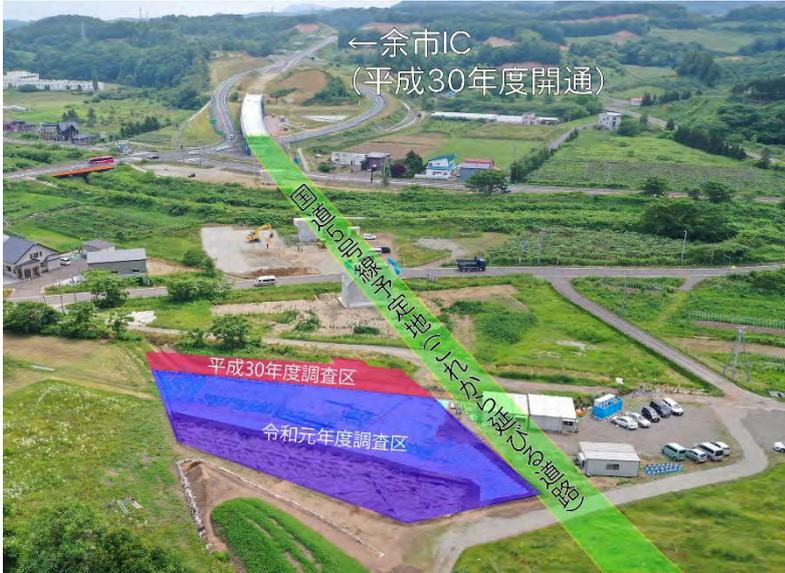
八幡山遺跡調査報告

よいち水産博物館 学芸員 中塚凧沙



1) 八幡山遺跡調査概要

Q. 調査がはじまったのはなぜ？



平成30年12月に開通した後志自動車道余市ICから仁木方面へ延伸する一般国道5号倶知安余市道路(共和-余市)の建設に伴い、試掘調査が行われました。その結果、縄文時代の土器の破片などが確認されました。これを受けて、道路建設前に遺跡を調査、記録するために、平成30年度から発掘調査がスタート。令和元年度まで調査が行われ、総面積2,418㎡が調査されました。

■ポイント解説 その1「遺跡」■

昔の人々が住んでいた、活動していたことがわかる場所を遺跡といいます。

■ポイント解説 その2「試掘調査」■

試掘調査とは、遺跡の場所(包蔵地といいます)や遺跡の近くに新たに家や道路などが建設される際、その場所に遺跡があるかどうかを調べるものです。これは、工事によって遺跡が破壊されてしまうことと工事中に遺跡が見つかることと工事を止める必要が出てしまうため、事前に調査を行います。

今回の場合は平成30年4月に八幡山遺跡・登町10遺跡・水田の沢1遺跡・水田の沢2遺跡・登町12遺跡・安芸遺跡・黒川2遺跡の総面積135,400㎡が工事区域内の試掘調査の必要な範囲となったために調査が行われ、その結果、八幡山遺跡で発掘調査が必要だと判断されました。

八幡山遺跡の試掘調査では、縄文時代中期～続縄文時代の土器や石器が見つかりました。しかし、調査区からより標高の高い地点や山の反対側ではすでにブドウ畑などの開発の際に遺跡が削平されていたようで、包蔵層(昔の住居や墓、土器、石器などがみつかる遺跡の土)がのこっていませんでした。

こうした調査によって、発掘調査の必要な範囲とそれ以外の範囲が決まります。調査が必要な範囲では私たちが発掘調査を行い、それ以外の範囲では工事がすすめられます。

Q どのくらいの期間、調査されたのか？

平成30年度は9月3日から11月2日、令和元年度は5月13日から10月31日まで調査しました。その後、両年度共に11月から3月までは整理作業を行いました。、令和元年度には、報告書刊行作業も行われ、令和2年3月に2箇年度分の報告書が刊行されました。

■ポイント解説 その3「整理作業」■

発掘調査の整理作業とは、調査でみつかった遺物を洗って綺麗にしたり、注記とってみつかった場所やナンバーを遺物につけたり、バラバラに壊れてみつかった土器を組み直したりする作業のことです。これらの遺物や、調査時に確認した住居などの遺構のデータをもとに、調査された遺跡がどういった遺跡なのかを過去の町内外の調査結果などをもとに考えてまとめ、最後には遺跡の発掘調査報告書を完成させます。

■ポイント解説 その4「遺構と遺物」■

遺構とは、昔の人々が住んでいた家やお墓の跡など、当時の人々が生活していたとみられる痕跡のことです。また、地面の下からみつかる昔の人々が使っていた土器・石器などの道具を遺物といいます。

Q.調査した場所はどんな場所？

調査区は、余市町の市街地から東側へ5kmほど離れた標高8～15mの緩やかな斜面上に位置しています。調査前は、宅地・畑として利用されていました。



八幡山遺跡周辺には、調査がすでに行われている遺跡もいくつかみられます。これらは主に道路建設に伴い調査が行われました。平成元年に調査された登町2遺跡では、珪質頁岩とよばれる岩質で作られた石錐の集中が確認され、遺跡の時期は概ね縄文時代中期ごろでした。平成24～27年に調査された登町4遺跡では、動物を捕獲するためのワナの跡(Tピットとよばれます)や当時の人々が何らかの意図で掘った穴(土坑とよばれます)が多数確認され、遺跡の時期は概ね

縄文時代早期～中期ごろでした。そのほかにも、登町3遺跡は縄文時代中期、登町11遺跡は縄文時代早期の遺跡が見つかっています。また、八幡山遺跡より北西側には、安芸遺跡という縄文時代中期～後期ごろの遺跡が見つかっています。八幡山遺跡でも縄文時代の遺構は概ね縄文時代中期ごろのものが確認されているので、周辺の遺跡環境と合致しているといえます。

また、八幡山遺跡はこれまで発掘調査が行われたことはありませんが、昭和48年7月には周辺の畑で縄文時代後期ごろのものとみられる石棒が見つかっています。『登郷土史』(1986)によれば明治34(1901)年に遺跡名の由来となった八幡神社(旧登八幡神社)が丘陵頂上部に建立されましたが、昭和29年9月の台風で社殿が大きな被害を受けたことにより、昭和31年に現在の登街道沿いへ移設されました。その後、

八幡神社跡地は昭和 43 年に地元青年団の共同試験地となり、その造成中にブルドーザーで削平した際、縄文時代後期頃と考えられる環状列石が発見されました。発見地点はかつての八幡神社の境内にあたるため、一部の環状列石が偶然破壊をまぬがれていた状況でした。町内で環状列石として確認されている遺跡は、西崎山環状列石、警察裏山遺跡などがありますが、いずれも高台で見晴らしのよい場所であり、八幡山環状列石も同じような立地であったといえます。



↑ 八幡山環状列石



↑ 昭和 48 年にみつかった石棒 (余市水産博物館所蔵)

Q.八幡山遺跡の調査で何がわかった？

八幡山遺跡では、包含層から縄文時代、続縄文時代、擦文時代のものと思われる遺物が確認されています。

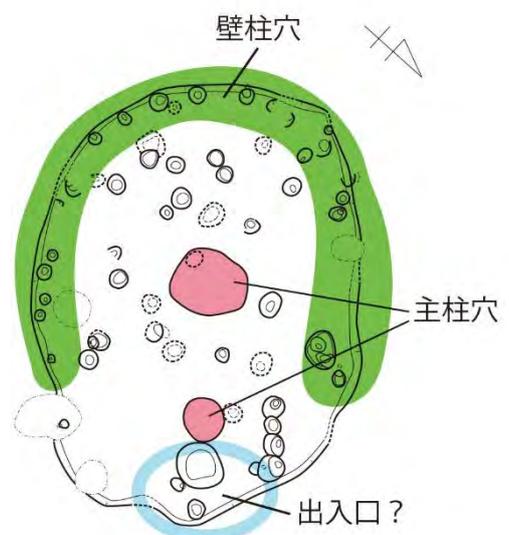
斜面の高い地点では縄文時代中期ごろと考えられる住居跡が 4 軒みつかったほか、当時のものと考えられる墓壇(お墓として使用された穴)群がみつかりました。この時期の遺構は八幡山遺跡周辺でも確認されていましたが、住居の構造が明確にわかる遺構や標高 10~20mほどの縄文時代の遺構は確認できていませんでした。今回の調査で余市の縄文時代中期ごろの様子が少しわかったといえます。

斜面の低い地点では擦文時代の住居跡が 3 軒みつかりました。通常の遺跡であれば上部に新しい時代の遺構、下部にいくほど古い時代の遺構が確認されますが、八幡山遺跡では、縄文時代の遺物や遺構が確認された土の層よりも下から、それよりも新しい擦文時代の遺構がみつかりました。これは、斜面の上の方から擦文時代より古い遺物が少しずつ下に流れてきたのではないかと考えています。擦文住居は 3 軒ともほぼ同時期のもので、おそらく、より登川に近い側に集落が広がっていたのではないかと考えられます。これまで、余市町では、余市川周辺や町西部でのみ擦文時代の住居跡が確認されていましたが、今回の調査で擦文時代の集落は町東部にも広がっていたことがわかりました。

2) 1号縄文住居

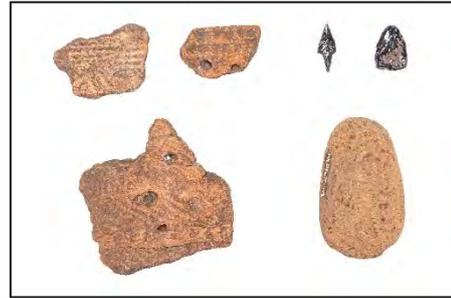
1号縄文住居(H1)は、縄文時代中期(北筒式期)ごろに使用された約4m×3mの住居です。

住居内には、主柱穴が 2 基、壁柱穴が 21 基、小土坑が多数確認されました。小土坑のなかには出入口にかかわる付帯施設に利用された可能性のあるものも確認されています。住居の北東側は南西側と比べて小土坑が少ないこと、また標高が低いことから、住居北側が出入口として利用されていたのかもしれませんが、住居南側は壁柱穴が巡り、このうちいくつかは住居内側に傾いていました。これらの斜めに作られた壁柱穴には、対になる位置に同様の壁柱穴がみられるものもありました。これらことから、H1は長軸線上に並ぶ主柱穴2つと壁柱穴で上屋や壁を造る構造をしていたと考えられます。





H1

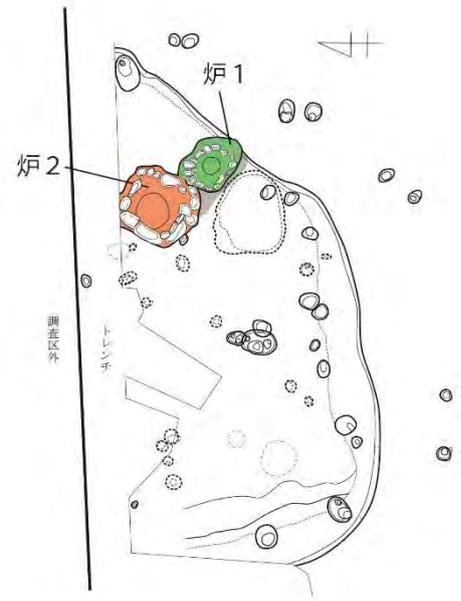


H1 遺物

3) 2号縄文住居

2号縄文住居(H2)は、縄文時代中期末(ノダップⅡ式期)ごろに使用された、平面形が概ね卵形だと思われる住居です。住居の西側は後世に攪乱を受けて破壊されており、北側は調査区外に伸びていることから正確な数値はわかりませんが、現状で約5.5m×3mの住居南側を調査しました。

住居内には、2基の石囲炉と小土坑が多数みついています。炉1は、炉を囲っていたであろう礫がすべて抜き取られており、16カ所の抜き跡がみられました。炉2は、6点の礫が残り、11カ所の抜き跡がみられました。炉の近くにはやや大きめの土坑がみつかりましたが、これは炉1を廃棄して新しく炉を作るために掘りこまれたものですが、何らかの理由で掘り終わった直後に埋め戻され、別地点(炉2)に作ったものと考えられます。また、住居内は改築・拡張されており、炉1は旧住居、炉2は拡張後の住居で使用されていたものだと考えられます。確認された小土坑の位置から推定される旧住居は約5m×3m程度であったことが想定されます。ここから、1mほど住居が拡張されたようなので、H2はより大きな住居だったことがわかります。炉1、炉2の火を焚いていた土をみると火床面が厚く残っており、改築・拡張前後に長期間使用されていたことがわかります。



また、炉2からは、強く熱を受けたまだ幼いイノシシの歯が2点みつかりました。これは、町内で初めて確認された縄文時代のイノシシの例です。炉1でも何の動物かは特定できませんでしたが、哺乳類の骨の骨片がみつかりしているので、イノシシを焼く行為が炉や住居の廃絶時の儀礼行為として行われていたのかもしれない。



H2



H2 炉1・2

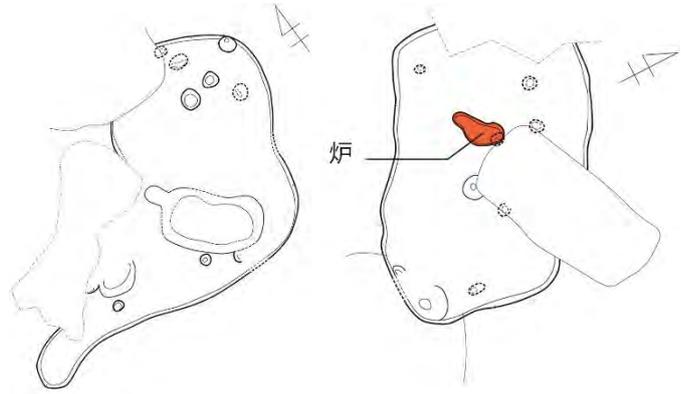


H2 遺物

4) 3号縄文住居・

4号縄文住居

3号縄文住居(H3)は、大部分が後世に攪乱を受けて破壊されているため不明確でしたが、現状で約3m×2mの住居だと考えられます。住居の年代においても、時期を正確に特定できる遺物が見つからなかったことから、周辺の遺構と同様に縄文時代中期ごろのものと考えました。



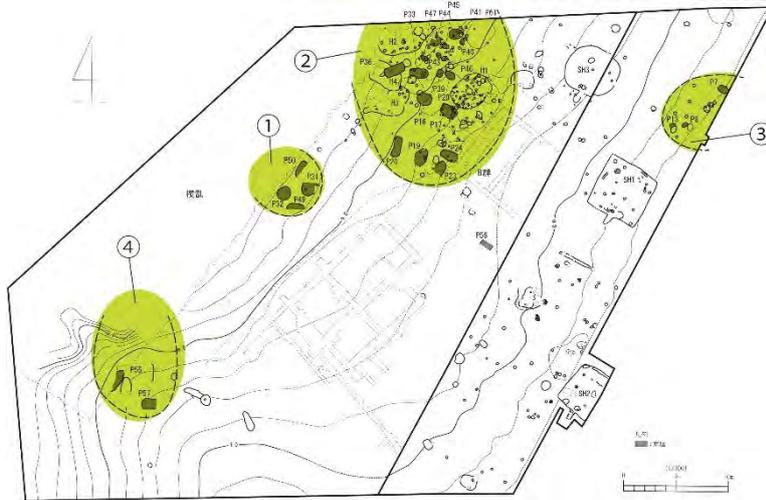
左：3号縄文住居 右：4号縄文住居

4号縄文住居(H4)は、北西側の大部分後世に攪乱を受けて破壊され、北東の一部他の遺構によって破壊されているため不明確でしたが、現状で約3m×2mの住居だと考えられ、炉が1基みついています。遺物は、縄文時代中期の土器片や意図的に置かれたような状況でみつかった剥片などが確認され、住居の年代は周辺の遺構と同様に縄文時代中期ごろのものです。

小さな住居であること、規則性のある柱穴がみられないこと、H3においては炉の痕跡がみられないことなどから、H3、H4ともに簡易的な建物として使用されていたと考えられます。

5) 八幡山遺跡の墓

八幡山遺跡では、28基の墓壙が確認されました。墓壙は大きく4つの範囲に分けられます。



① 令和元年度の調査区(中央北西寄り)。楕円形や円形の1.3～1.7m規模の墓壙が4基確認されました。うち、1基では副葬品と考えられる土器や黒曜石の破片が多量にみついています。

② 令和元年度の調査区(北側)。楕円形や円形及び長楕円形や角が丸い長方形の1m前後及び1.4～2m規模の墓壙が18基確認されました。この地点では墓壙以外にも遺構が集中しています。

一部の墓壙をのぞいて、いずれも墓壙の下層が埋土(人為的に埋めた土)、上層が覆土(自然に堆積した土)で、覆土の下面もしくは埋土の上面から黒曜石の破片などがみついています。

③ 令和元年度の調査区(北側)。楕円形の1m前後の墓壙が3基確認されました。この地点の墓壙は一部をのぞいて、大型の礫を伴う特徴をもちます(大型礫をもつ土坑は町内や小樽市の遺跡などでもみついています)。

④ 令和元年度の調査区(南側)。この地点では墓壙が2基確認されましたが、カクランなどによって大部分が破壊されていたため平面形は不明ですが概ね長楕円形だと思われます。②と同様に、覆土下面から埋土上面にかけて多量の黒曜石の破片がみついています。

各群ともに、平面形状や規模に一定の共通性はみられましたが、主軸方位(遺構の向き)には共通の規則性はみられませんでした。それぞれの墓が作られた時期は、①は縄文時代早期、②は縄文時代中期～後期、③は明確ではありませんが続縄文時代の可能性あり、④は時期不明でした。

これまで後志地方の居住域と墓壇との関係はよくわかっておらず、また余市町内では八幡山遺跡が立地する標高10～20m前後の縄文時代の集落跡は確認されていませんでした。今回調査された八幡山遺跡では、縄文時代後期以前この地域での居住域と墓は混在していたようですが、余市町を含む後志の当時の様相はいまだよくわかっていません。今後の調査で類例となる遺跡が増えていけば、当時の様相が少しずつわかってくるかもしれません。

6) 余市町と擦文時代

擦文時代の「擦文」とは、この時期の土器に木のへらの擦り跡がみられることから「擦文時代」とよばれています。これは、7～12世紀、本州では飛鳥・奈良・平安時代ごろにあたります。このころの北海道は、本州との交易がより活性化し、本州の文化の影響を受けながらも続縄文時代から続く独自の文化を発展させていました。擦文時代は後のアイヌ文化に物質的な面で影響を与えたと考えられています。

余市町内では、多くの主要な遺跡が東部に存在しています。これまで調査された町東部にある遺跡の主な時期は縄文時代でしたが、八幡山遺跡の調査では、3軒の擦文時代の住居跡が確認されました。前項でもお伝えしたとおり、これは町内で確認されている擦文住居跡の最も東に位置しています。

余市町の遺跡で擦文時代の住居跡が確認されている遺跡は、沢町遺跡、天内山遺跡、大川遺跡、そして今回調査された八幡山遺跡です。擦文時代の遺跡は川・河口の近くで多く発見されています。余市町の擦文住居跡も、ヌッチ川、余市川、そして登川の近くにあります。



■ ポイント解説 その5 「年表で時期を確認」 ■

本州の時代区分→	縄文時代					弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代	明治・大正・昭和・平成・令和時代
	旧石器時代					続縄文時代			擦文時代		アイヌ文化期					
北海道の時代区分→	早期	前期	中期	後期	晩期	オホーツク文化期				中世		近世	近代			
	BC 20,000	BC 6,000	BC 4,000	BC 3,000	BC 2,000	BC 1,000	BC 300	0	400	600	800	1,200	1,300	1,600	1,900	

擦文住居は竪穴式で隅が丸く四角い形のものが多く、住居内にはそれぞれの隅の対角線上に支柱穴という上屋を支える柱の穴の跡が 4～6か所設けられ、炉やカマドがみられます(4m以下の小さな住居は支柱穴が無いこともあります)。

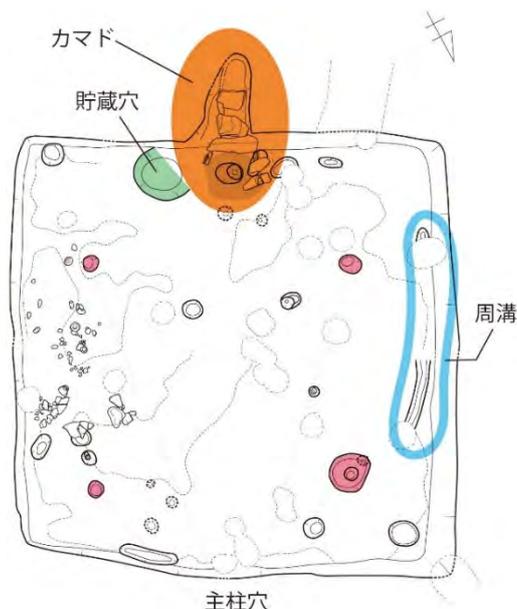
住居内のカマドは、現在では台所にあたる場所です。石でしっかりと芯をつくり、煙道を掘り、天井部分をつけるものも見られます。カマドでは煮炊きをする土器の底を支える支脚として使われたとみられる石や土器やがみつかることもあり、周辺では道具として使われた土器や石器がみつかることもあります。

7) 1号擦文住居

1号擦文住居(SH1)は、9世紀ごろに使用された約5m×5mの住居です。住居内には南西向きのカマドや貯蔵穴、支柱穴4基などのほか住居内の壁際の一部には周溝も確認されました。

カマドは一定期間使用されていたようで、燃烧部では骨片や炭化材がみつっています。また、カマドに使用されていた石は、余市水産博物館のあるモイレ山と同じ流紋岩だと思われます。

この住居の特徴として、カマドの袖石の抜き取り(=カマドの破壊行為)、カマド燃烧部の清掃、大形土器の破却などの痕跡がみられることから、住居廃絶時に何らかの儀礼行為が行われていたのかもしれません。



SH1



SH1 床面の遺物出土状況



SH1 床面の遺物出土状況

(拡大)



SH1 カマド



SH1 遺物

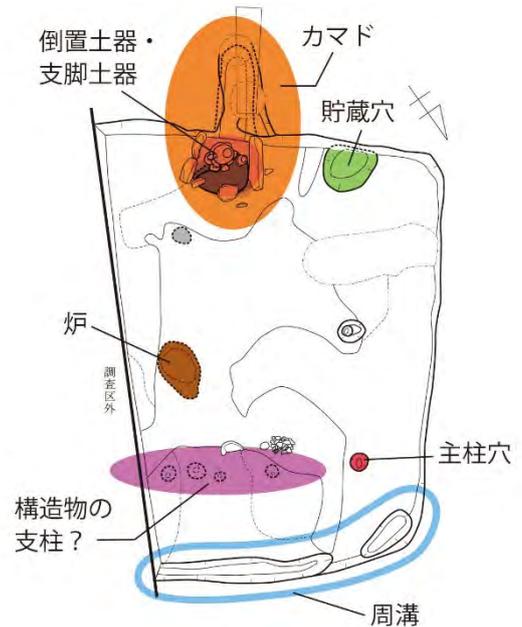
8) 2号擦文住居

2号擦文住居(SH2)は9世紀ごろに使用された、約5m×4mの住居です。住居の東は用水路により壊されており、本来は長方形に近いものと思われます。住居内には南西向きのカマドや炉、貯蔵穴、周溝などが確認されています。

カマドの中央には大型の甕が倒置されて(反対に置かれて)いましたが、支脚として使用したとすれば高すぎること、また熱をほとんど受けていないことから、カマド廃絶後に置かれたものと考えられます。また、大型の甕の脇からは小型の甕が2つみついています。この小型の甕は、高さが10cm程度のものと、意図的に口縁部が欠かれた15cm程度のものであり、どちらも熱を強く受けている痕跡がみられることから、これらは支脚として使われた土器のようです。また、カマドの燃焼部の掘り込みは灰などの燃えカスは取り除かれたのちに埋め立てられ、その上に大形土器が倒置されました。埋め立てに使用された土からは骨片やアワ・キビ・オオムギなどの栽培植物が確認されています。

1号擦文住居のような住居の主柱となる柱穴は1つしか確認されませんでした。直線的に並ぶ穴(ピット)が確認されています。これは、何らかの構造物の支柱であった可能性も考えられます。

この住居の特徴として、カマドの壁の除去、燃焼部の清掃、大型土器の倒置、燃えカスの散布などの痕跡がみられます。SH1と同様に、住居廃絶時に何らかの儀礼行為が行われたのかもしれませんが、土の不自然な堆積から、廃棄儀礼としてカマドの上屋の破壊が行われた可能性も考えられます。



SH2



SH2 カマド倒置土器出土状況



SH2 カマド支脚土器出土状況 1



SH2 カマド支脚土器出土状況 2



SH2 遺物出土状況

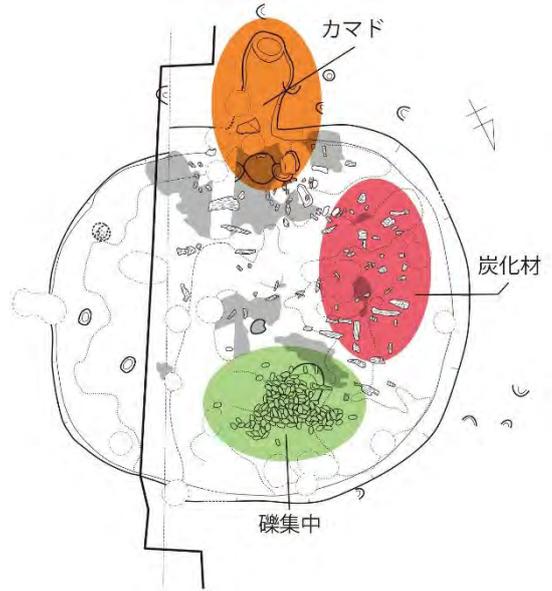


SH2 遺物

9) 3号擦文住居

3号擦文住居(SH3)は、9世紀ごろに使用された約5m×5mの住居です。SH3は、南東側の1/4程度を平成30年度に、残りの3/4程度を令和元年度に調査されました。住居内には南西向きのカマドや炉、礫(れき)集中などが確認されました。カマドに使用されていた石は、SH1と同様に余市水産博物館のあるモイレ山の流紋岩だと思われます。

この住居の特徴として、まず住居北側で169点の礫が集中して見つかりました。礫は平均して、約10cm×5cm、厚さ3cm、重さ240g程度のもので、住居内で確認された礫のうち約95%がこの集中部で確認されています。この礫は数の多さからも錘(おもり)として使用されたものだと考えられ、29点には浅く窪んだ使用痕がみられました。また、2つめの特徴として、住居西側床面で多くの炭化材が見つかり、これは住居の上屋が焼失した結果の堆積だと考えられます。上屋の焼失やカマドの破却、床面遺物の少なさなどから、住居廃絶時に何らかの儀礼行為が行われていたのかもしれない。



SH3



SH3 レキ集中



SH3 レキ集中拡大

10) その他の遺物

・石棒

石棒の先端部だと思われます。これまで町内の遺跡や過去に八幡山遺跡でも石棒が確認されていますが、それらの石棒とは石質や形状が異なっているようです。

石質は、輝石安山岩、斑部分は捕獲岩(凝灰岩)と考えていますが、捕獲岩をこれだけ含んでいるものは珍しく、意図的にこの石質を選んだとすれば、採集は非常に難しいようです。



■ポイント解説 その6「石棒(せきぼう)」■

縄文時代中期～後期ごろに作られた、棒状の石製品です。一端または両端に頭(瘤状のふくらみ)があり、儀礼や儀式で使用された道具だと考えられています。

余市町では、八幡山遺跡周辺の畑で完全な形の石棒が見つまっているほか、大川遺跡などでも石棒が見つかっています。

・土製はずみ車

1号擦文住居周辺の攪乱区から発見された遺物ですが、擦文時代のはずみ車と考えています。町内では、大川遺跡でも同じ形状のはずみ車が見つっています。



■ポイント解説 その6「はずみ車」■

はずみ車とは、「おもり」として使われた道具です。中央の穴に棒を通して、その棒に繊維の端を結び、繊維を引き出しながらよりをかけて糸にするための形状は円板、円錐などのものがみつっています。



11) 八幡山遺跡

平成30年度、令和元年度の2箇年あわせての調査でみつかった遺構は、縄文住居4軒、擦文住居3軒、土坑59基、小土坑172基、剥片集中10基、炉跡8基、集石4基、溝状遺構1基、性格不明遺構2基が検出されています。遺物としては、土器1,833点、土製品1点、石器14,687点、石製品7点、陶磁器160点、金属製品38点、ガラス製品8点などのほか、炭化物や種子、骨片などがみつっています。土器は縄文時代早期～晩期、続縄文時代、擦文時代のものがみられますが、縄文早期(東釧路Ⅳ式)のものが最も多くみつかりました。ただし、早期の土器は八幡山遺跡の遺構に直接関わる形ではほとんどみつかっておらず、遺跡の中心となる時代は縄文時代中期と擦文時代でした。

平成30年度調査では、これまでの調査で町の西側や余市川周辺でのみ確認されていた擦文時代の集落が町の東側にも広がっていたことがわかりました。令和元年度調査では、これまで町内では確認されていなかった標高10～20m前後の縄文時代の集落の状況が新たにわかりました。今回の調査によってみつかった住居は、縄文時代中期と擦文時代でした。つまり、縄文時代中期ごろの人々が生活していたのと同じ場所で、約3,000～4,000年後に擦文時代の人々も生活していたこととなります。その後、同じ山の頂上付近では明治時代の人々が八幡神社を作り、その神社も昭和29年の台風で壊れてしまい昭和時代の人々によって神社は移設され、現在、令和時代の人々によって道路が作られようとしているのです。道路が開通した折には、ぜひこのことを思い出してみてください。

また、令和元年度の調査成果を3月に「八幡山遺跡講演会」として皆さまに報告する予定でしたが、今回の新型コロナウイルス感染拡大を防ぐために、講演会は中止となってしまいました。そこで、なにか別の形での報告はできないものかと考えて、博物館の開館にあわせて、このような形での報告となりました。さらに、令和2年度も道路延伸に伴う遺跡の調査が、八幡山遺跡より南西側(仁木町方面)にある登町10遺跡で行われます。登町10遺跡はどのようなものがみつかるのでしょうか。次の調査も楽しみです。



参考文献

2020『八幡山遺跡』余市町教育委員会

2000「八幡山ストーンサークルについて」『よいち水産博物館研究報告3』乾芳宏

1986「登町の先史時代」『登郷土史』余市町登町区会